

Introduction to Text Linguistics

Robert de Beaugrande & Wolfgang Dressler

(Longman London £5.50. 270P 1981)

近年、急速に盛んになってきた言語研究の一分野であるテキスト言語学、談話分析を背景に書かれた本書は、単に入門書というだけでなく、その分野を展望するのに格好の本でもある。テキスト言語学はドイツで盛んに行なわれてきた分野であり、本書も、本来は *Einführung in die Textlinguistik* (Dressler, 1972) の翻訳に、1972年以後の研究の動向を付け加えるという形で、Beaugrande & Dressler によって企画されたものであるが、1972年以後の急激な発展を考慮し、学際的視点から根本的に書き直されたものである。

この本を貫く基本的概念は、textuality — textを無関係な語や文の単なるつながりではなく、意味のある統一された全体として成り立たせているもの——である。著者は、text そのものを分析対象にするのではなく、text を人間の活動として、すなわち textual communicationを研究することを主張する。そして、textual communication の textuality に関わる principles として constitutive principles と regulative principles を立て、その両方を研究することが必要だとしている。前者は、textual communicationを規定する principles であり、後者は、textual communication をコントロールする principles である。前者としては、cohesion: coherence: intentionality: acceptability: informativity: situationality: intertextuality が、また後者としては、efficiency: effectiveness: appropriateness が挙げられており、本書は、前者の7つの principles を順番に取り上げつつ、後者の3つの principles を論じるという構成をとっている。

著者は、該博な知識を背景に、言語学、認知心理学、サイバネティックス、人工知能、社会学、教育学等と関連づけながら、様々な角度からテキスト言語学に焦点を当てている。このことは、30ページにも及ぶ豊富な引用文献の

リストからもうかがえる。テキスト言語学の近年の発展は、著者自身述べているように、古い理論の単なる拡張ではなく、学際的研究下の根本的変革であり、それにより、テキストの科学となっているのである。

(前 原 寛)